

<中央線沿線あんない>

## 製糸技術史の宝庫＝岡谷蚕糸博物館

佐々木 享

技教研第8回全国大会が長野県松本市で開催されるので、新宿からの通りみちの岡谷にある市立岡谷蚕糸博物館の紹介をしたい。

日本資本主義の発達史を少しでも学んだものは、日本における養蚕・製糸業の果たした役割の重要性と特殊性を知っている。生糸と絹織物とは、ながいあいだ、わが国の最も重要な輸出品であったからである。それは、輸出金額において、わが国の輸出品目中最大のものであった。明治末以後、綿糸・綿織物もしだいに輸出産業として成長してくるが、明治中期に国内綿花が衰微（やがて消滅）して以来、原綿は輸入されるようになったから、等しく重要な輸出産業ではあっても、原料を国内養蚕業に完全に依存していたという点で、製糸業は日本資本主義史上に特殊な位置を占めていた。

製糸業が最も発達していたのは長野県で、その中心地は南信州の岡谷（旧平野村）をふくむ諏訪地方であった。その岡谷に、市立蚕糸博物館が設立されていて、多数の、貴重な技術史資料が展示されている。岡谷駅から歩いて15分、バスで5分くらい。もっとも特急は岡谷には停車しないから、特急利用の人は上諏訪で下りて駅前から、岡谷行きのバスに乗ればよい。バスの本数は多い。

まえに、『会報』83号にも書いたことだが、わが国の養蚕・製糸関係の資料を保存している所としては、この岡谷市立蚕糸博物館のほか、都下武蔵小金井にある東京農工大学の繊維博物館、横浜にあるシルク博物館などがあるが、私の知る限り、岡谷の博物館がもっとも充実している。地元で中学校長を勤めた伊藤さんが、ひじょうに精力的に、岡谷周辺だけでなく、かなり広い地域にわたって、資料をしゅう集する努力を重ねてこられたか

らである。たとえば、明治初年に外国技術の伝習工場として設立された有名な富岡製糸場（群馬県、この工場のれんが造りの建物は今も使用されている）で使われた器械は、今では岡谷でしか見ることができない。

製糸技術は、幕末・明治初期まで行なわれた座繰りから、外国技術の影響を受けた改良座繰り、そして器械製糸と発展した。「機械」としないで「器械」と書くのは、習慣ではあるが、蚕から糸口をとりだす索緒とその糸をより合わせる接緒という工程が手作業のまま残っていたので「機械」とは云いにくかったのであろう。索緒と接緒が手作業から解放されたいわゆる半自動の製糸機械が御法川（みのりがわ）直三郎によって発明され、片倉で使われはじめたのが昭和の初年。この半自動と器械製糸の共存時代は何と1950年代まで続く。現在の製糸機械は、これにたいして全自動と呼ばれる。岡谷の博物館には、これらすべての段階のものがひとつおりに揃っている。

百聞は一見にしかずだから、現地のみでただけはよいわけだが、さいごに製糸業に関して、若干の書物を紹介しておく。製糸技術は、労働のあり方との関係が深いのだが、博物館には器械は並んでいても、労働者（いうまでもなく女工と呼ばれた。もっとも昭和初期までは工女とっていたようだが）の生活は陳列されていないので、本を調べなければならぬからである。

①楫西光速・帯刀貞代・吉島敏雄・小口賢三『製糸労働者の歴史』（岩波新書）

簡潔でいちばん便利な本だが、書店で増刷していないので、図書館か古書でみつけるしかない。

②楫西光速『技術発達史（軽工業）』1948年、河出書房

綿糸紡績と製糸の技術史だが、おそらく図書館でみるしかない。

③『平野村誌』下巻、1932年。

平野村は今の岡谷市の中心部分。入手しにくいのが難点。

④大日本蚕糸会信濃支部『信濃蚕糸業史』上、中、下巻、1937年。

よくまとまっているが、従来古書で8万円もしていたのが難点。今年の4月に、信濃毎日新聞社がそっくり再版して発売しているので入手しやすくなった。全3巻で3万8千円。

いくら専門的に扱ったものとして以下の3点だけあげておく。

⑤日本学士院編『明治前日本蚕業技術史』

1960年、日本学術振興会

⑥北島正元編『製糸業の展開と構造——幕末

・維新时期諏訪についての調査報告——』1970年、塙書房

⑦石井寛治『日本蚕糸業史分析』1972年、東京大学出版会

石井氏のものは諏訪製糸だけでなく、近代日本の養蚕製糸業史研究である。

⑧庄司吉之助氏が製糸業に関する論文をたくさん書いている。関係あるものだけ紹介すると、「幕末・明治前期における製糸技術史序論」『東北経済』636(1961年9月)、「明治20年代における製糸技術の形態」同誌637(1961年10月)、「近代製糸資本の展開過程」『商学論集』30巻2号(1961年1月)、「製糸労働者史序説(一)」同誌31巻1号(1962年6月)、「製糸労働者史序説(二)」同誌31巻2号(1962年9月)がある。いずれも福島大学経済学部雑誌。同学部に問合わせれば入手できる(もし雑誌がないときは、実費でコピーを分けてもらえる筈)。

⑨いま、私の手元にないが山本茂実『あゝ野麦峠』朝日新聞社刊、はいまでも入手できる手頃な書物である。

## <松本市付近のあんない>

技教研全国集会は松本市の近郊で開かれますが、松本市及びその付近には見るべき博物館・美術館などがいくつかあります。ここでは日本民俗資料館、旧開智学校、碓山美術館を御紹介します。大会からの帰りかけなどにどうぞ。

### 日本民俗資料館

松本城のある中央公園内に建てられたこの資料館は昭和41年に設立されたものである。NHKテレビ映画「水色の時」の舞台となっているこの資料館は年々訪問者が増えているとのことである。

展示資料は、考古部門——土器、石器類、歴史部門——松本城に関する絵図などの資料、民俗部門としては、農耕用具、民間信仰資料、七夕人形、消防用具、特産物加工用具、

婚礼用具、玩具、食具、燈火用具、居住用具、服飾、髪飾、交通関係、はきものなどがある。中には重要民俗資料指定にされているものがあり技術史研究の一助ともなる。

(位置——松本市丸の内4番1号。開館時間——午前9時より午後4時半まで。入場料100円)

### 重要文化財 旧開智学校

明治6(1873)年5月に開校されたこの学校は和洋混合の様式でつくられており、わが国の建築文化史上貴重な遺構とされている。

また、旧開智学校は、明治初年におけるこの地方の教育文化興隆の中心であり、信州教育の発祥校ともいわれている。したがってこの学校には明治初年からの貴重な教育資料—